

## 住み慣れた土地で安心して最期まで暮らせるように

諏訪豊田診療所院長 小松 佳道

### 自然と医師の道，呼吸器内科の道に

父，祖父をはじめ親族に医師が多く，親戚の集まりでは自然と医療の話題が中心になるような環境で育ちました。それでも「医者になれ」と言われたことはありませんでしたが，お酒が進むといつも研究に情熱を傾けた頃の話を楽しそうにする父の姿が印象に残っていました。また，小さい頃には，4歳年の離れた弟が喘息発作をたびたび起こしており，その苦しむ姿と治療にあたる父の姿を目の当たりにし，子どもながらに「自分も役に立ちたい」という思いをもったことが，医師の道に進むきっかけになったように思います。

2000年に東海大学医学部を卒業し，2003年に信州大学医学部内科学第一教室呼吸器・感染症・アレルギー内科に入局しました。当時，教授であった久保恵嗣先生（現 地方独立行政法人長野県立病院機構 理事長）は，先進的な研究とともに実臨床を大切にされており，患者さんの顔を見てしっかりお話を聞く，頭から足先まで全身をみるという診療の基本姿勢を学びました。

学位論文では，小児喘息が寛解した若年成人の気道炎症と気道過敏性について調査しました。その結果，小児喘息の既往をもつ若年成人の約半数に気道過敏性の亢進，好酸球性の気道炎症，軽度の気流閉塞がみられたのです<sup>1)</sup>。これは，小児喘息寛解後も気道のアレルギー性炎症や過敏性が残存し，喘息再発の可能性があることを示唆しています<sup>1)</sup>。実際の外来でも，風邪を繰り返している，

咳が長引いているといった訴えで受診する患者さんのなかに，小児喘息の既往がある症例を経験します。幼い頃に喘息があったことを忘れている方もありますので，こうした「かくれ喘息」を見逃さないためにも丁寧な問診を心がけています。

### 38歳で診療所のあとを継ぐ

2008年には諏訪赤十字病院呼吸器科に赴任し，3人体制で約30～40人の患者を受け持ちました。市内唯一の基幹病院であるため，急性期から慢性期の方までさまざまな状態の患者さんが来られます。病棟は肺癌患者が多く，化学療法の導入や維持治療を，間質性肺炎や慢性閉塞性肺疾患（COPD）の増悪では救急外来からICUの管理をすることになるケースもありました。また，呼吸ケアサポートチームの立ち上げに参加し，理学療法士や臨床工学技士など多職種で院内全体の呼吸管理・ケア方法について検討しました。

そして4年経った頃，父に肺癌が見つかったのです。診断したのは私でした。初期だったため手術をして化学療法を行いました。半年後に骨転移が発覚。2013年，38歳で父が院長を務めていた諏訪豊田診療所を継ぐことになりました。診療所には，小児から高齢者まで，専門外の患者さんも幅広く受診されます。患者さんとのコミュニケーションや身体診察を大切にするという信州大学内科学第一教室のスタンスは診療所の外来にも大変役に立つものであり，また諏訪赤十字病院でさまざまな状態の患者さんに対応した経験も今に生き